

研究結果報告

報告日 平成27年4月30日

グループ名	清二研究会	フリガナ 代表者氏名	マエザワ クラト 前沢 蔵人
学校名 (代表者)	江戸川区立清新第二小学校	電話番号	03-3878-1261
研究テーマ	「通常の学級と特別支援学級との交流効果」		
研究期間	平成19年 4月 1日 から 平成27年 3月31日 まで		

主題設定の理由

本校は、平成19年度から特別支援学級が開級されている。開級以来、通常の学級と特別支援学級の児童の交流活動は急務であった。そして交流に関する研究が始まった。様々な取り組みを行っていく内に、子ども同士は自然と関わり、どのような交流に効果があるのか明らかになりつつある。そこで開級から8年目となる本年度、今までの実践を振り返り、どのような取り組みがどのように効果があったのか整理をする。そして児童、教職員、保護者の立場から検討を加えることにする。

研究の概要

1. 児童における交流効果

①交流学習・交流給食

特別支援学級に在籍する子どもの中でも、教科や領域によっては通常の学級で学習できる子どもがいる。その子どもにとっては、通常の学級で学ぶことは自分の能力を大きく伸ばす機会となる。そして少人数である本校の通常の学級において、より多くの考えや意見が出るということは協働の学びとして大変有効である。本年度は、算数、理科、音楽、体育で実施された。また毎日、通常の学級で給食を食べる子どもがいた。学校生活において授業や給食に占める割合は大きい。このように一緒に生活することは、互いの理解を深め、さらに学級の枠を越えて、学年意識を高めることにもつながった。

②たてわり班活動

本校には、8つ異学年グループがある。1つのグループに1年生から6年生が所属し、そして特別支援学級の子どもも、それぞれのグループに所属する。たてわり班では、1年生を迎える会から始まり、全校遠足、たてわり給食、青空給食、たてわり清掃、そし

て様々な児童集会で活動をする。たてわり班では、通常の学級や特別支援学級に関わらず下学年の世話をする上学年の子どもの姿が見られる。それぞれ自分の役割を自覚し、それぞれの立場で活動することは、責任感や自己肯定感の向上を果たし、そして時には我慢をするということを学んだ。

一方、たてわり班を指導する教員の意識も高まる。グループによっては特別支援学級の担任が入らない班もある。通常の学級担任が指導をしなければならない。そのために、教員は日頃から子ども理解を進める必要がある。

③学校行事

本校では、運動会や音楽鑑賞教室など、多くの学校行事が行われている。少人数の学校であるがゆえ、運動会の表現運動は1～3年生、4～6年生の2つに分かれて実施されている。その中には、特別支援学級に在籍する子どもも一緒に入ることになる。また本校の在り方として、特別支援学級に在籍する子どもをまとめた隊形を組むのではなく、通常の学級の子どもの中に混ざって隊形を組む。そうすると通常の学級担任も特別支援学級の子どもの支援を行うことになる。通常の学級の子どもはそれを見て、支援の仕方を学ぶ。

音楽鑑賞教室においては、特別支援学級の複数の子どもが落ち着かない面が見られた。しかし、対応できる特別支援学級担任の人数は限られる。すると通常の学級担任も特別支援学級の子どもたちの対応に当たる。やはり通常の学級の子どもたちはそれを見ている。通常の学級では、特別支援学級の子どもたちに対して「親切に下さい。」と言葉での指導はない。子どもたちは、教師の動きを見て学んでいるのではないかと考えられる。

④宿泊行事

本区では、特別支援学級設置校の合同宿泊が行われている。しかし本校では、開級以来、5，6年生の宿泊行事は合同宿泊ではなく通常の学級と一緒にやっている。準備の段階を含め、寝食を共にするということは子ども同士の理解を進めるには大変有効である。本校では、こちらの宿泊を一緒に行うためには事前に何をしたらよいかと考え、様々な交流を考えてきた。そういう意味では、宿泊行事が大きな柱となっているといっても過言ではない。社会に出たら同じ世界で生きていくことになる。これらの活動により、得手不得手は一人一人の個性であり、障害の有無とは関わらないことを子どもたちは体得した。

2. 教職員による交流効果

①学校長による学校経営方針

学校長の学校経営方針に、教員は全ての子どもの担任であるという項目がある。したがって専科教員を含め、担任していない子どもも担任であるという意識が必要になる。それは特別支援学級の子どもにたいしても同じである。褒めるときには、どの教員であっても褒める。叱るときには、どの教員であっても叱る。そのような教員の隔たりがないことが、一緒に学校生活を営むということの一助となった。

②校内研究

本校では、通常の学級も特別支援学級も同じ研究主題で校内研究に取り組んでいる。研究授業や研究協議会も一緒に行われ、子どもの実態に即した授業改善の在り方について研究をしている。このことは、教師の指導法を学ぶのはもちろんのこと、それぞれの子ども理解につながる。

また特別支援学級では、指導にはスモールステップの細かな指導の配慮がなされており、興味・関心が継続できるような教材の工夫もなされている。これらを通常の学級の教員が見て、そして研究会に臨むことは、授業のユニバーサルデザイン化に生かすことにつながる。よって校内研究は、子ども理解と教師の指導法の両面から大変有効なものであると言える。

③通常の学級・特別支援学級交流研修

特別支援学級の日頃の指導は、校内研究同様、様々な細かな配慮がなされている。その指導法を学ぶため、そして特別支援学級の子どもの日頃の様子を理解するために、通常の学級・特別支援学級交流研修が実施されている。通常の学級の担任は専科授業になっているときに特別支援学級に行き授業参観を行う。さらに自分の学級の給食指導を専科教員に託して、特別支援学級の給食指導も参観に行く。自分の目で授業や給食指導を見ることは、大きな学びがあると同時に特別支援学級の子ども理解につながる。

一方、特別支援学級の担任は、通常学級の授業参観に来る。通常の学級にも特別な支援が必要な子どもがいる。そのような子どもに対してどのような支援ができるのかなど、具体的なアドバイスをもらうことができる。また、通常の学級の子どもたちの理解にもつながる。このようなシステムを組むことによって、教師同士の交流を深めることができた。

④特別支援教育研修

特別支援学級のみならず、通常の学級であっても特別な支援を必要とする子どもがいるのはどの学校にもあることである。そのような子どもに対して、どのように対応していったらよいのか、また指導法を学ぶための研修を実施した。この研修からは、具体的には支援の在り方を検討することができた。また特別支援学級の子どもに関しては、個々にどのような対応をするのがよいか共通理解を図ることができた。例えばパニックを起こした子どもに対してどのような対応をすればよいのかを知ることは、指導上の一貫性が図れる。学校長の学校経営方針を遂行するためには、大切な研修会であった。

⑤生活指導会議

子どもたちが生活する上では、様々な問題が生じる。本区では放課後の子どもの居場所として「すくすくスクール」というものがある。こちらでは、学級や学年、特別支援学級などの枠組みはなく一緒に生活している。学校生活とは違った面が見られる。そのスタッフからの見立てを聞いたり、学校での様子を知らせたりすることは、大きな価値がある。また生活指導会議には、身体的な状況を知る機会にもなった。

通常の学級と特別支援学級の経営の方針を互いに共有し、互いに理解し合って信頼関係を結んだ。そして通常の学級担任が特別支援学級に在籍する子どもの特性を理解し、また特別支援学級担任も通常の学級に在籍する子どもや集団を理解することによって、共に子どもを育てる意識をもった。

3. 保護者による交流効果

① P T A活動

本校の P T A活動には、通常の学級の保護者のみならず特別支援学級の保護者も多く参加している。P T A役員会・運営委員会、P T A行事の実施、P T A子ども安全見守り隊、宿泊行事サポート、学年親子活動の合同実施、卒業に向けての保護者サポートなどがそれにあたる。特に学年での行事においては、通常の学級も特別支援学級は多くの学校の1組と2組と同じような立場で動いている。保護者同士がそのような交流をもつことによって互いの子ども理解にもつながる。このことは子ども同士にとっても大きな良い影響がある。

② 学校統合会議

本年度は学校統合に関わる話し合いが多くもたれた。学校設置者である区の方針により、本校の通常の学級と特別支援学級は分離し、そして別の2つの学校と統合されることになった。保護者はそれぞれの立場にある子どもたちを、どのようにしたらより良く育てられるのか、保護者同士の高い意識をもつことができた。

4. 共通しての交流効果

小規模校である本校では、児童や教職員、保護者が一人一人のことを理解している。そして日々の何気ない多くの交流が理解を促し、一人一人の人権を大切にしている。これらは特別のことではなく、当たり前のこととして行われている。社会に出たら障害の有無に関わらず同じところで生活することになる。本校が行っている様々な交流は、結果的にインクルーシブ教育つながっていると考えられる。

研究の成果と今後の課題

開級以来、本校で行ってきた交流を一つずつ整理し、何がどのような影響を与えてきたのか再検討した。その結果、特別なことを行ってきたということは見つからなかった。子ども同士、教員同士、保護者同士の日々の小さな交流が、大きな影響を与えていることが分かった。平成19年度の特別支援学級開級理念である、通常の学級と特別支援学級に隔たりを作らないということを、学校長をはじめ全ての教員が同じ方向を向き子どもの指導にあたってきたことが今に至っていると考える。またそれは教員だけではなく、子どもにも大きな影響があり、そして保護者同士へも影響があった。子どもと教員、保護者の三者が同じ意識で取り組めたことが、子どものより良い人格形成に役立っている

と考える。

そして本校は平成28年3月で閉校となる。そして閉校後は、通常の学級と特別支援学級が分離して、それぞれ2つの学校と統合されることになった。本研究は、なかなか例を見ない研究であると自負している。最後となる次年度も継続し、それぞれ統合後の学校で生かせる実践の積み重ねをすることが大きな課題となる。